

大南の軌跡

武蔵村山市立 小中一貫校
大南学園第七小学校
学園だより No. 4
令和2年7月1日

「負の力」でコロナの時代を乗り切る

校長 五十嵐 誠一

子供たちの声が学校に戻ってきておおよそ1カ月が過ぎました。先週から高学年児童による委員会活動も始まり、ようやく学校がその形を整えつつあります。保護者会でも申し上げましたが、御家庭ではこの休校中、きめ細かく子供たちの学習と生活にお心配りをいただき、改めて感謝を申し上げます。少し短くなりましたが、どの子にとっても大切な小学校の1年を充実したものにできるように教職員一同、精一杯の努力をしております。

さて、今回の感染症は人類にとって未知のもので、その対処法が未だに確立されていない部分があります。近い将来、このウイルスを制する方法が確立されることとは思いますが、多くの人々が未だ不安の中にいます。人間はそもそも「分かりたがる脳」を持っていて、訳の分からないことは耐えがたいという性質があるそうです。

そんな中、2年前に読んだ本のことを思い出しました。それは、小説家で精神科医でもあるははきぎ ほうせい 幣木蓬生氏の書かれた「ネガティブケイパビリティ～答えの出ない事態に耐える力～」という本です。

ネガティブケイパビリティとは「負の力」とも呼ばれるものです。人が直面する問題に対して性急に答えを出すことなく、何とかそれに耐え、持ちこたえていける能力のことです。こう書くとなにやら後ろ向きな考え方の

ように思えますが、決してそうではありません。

例えば、子供たちも日々様々な問題や困難に出合います。その中には子供同士の人間関係のように簡単には解決のできないものがたくさんあります。これらに特效薬的な解決方法というものは存在しません。

しかしここに一つの救いがあります。私たち人間には、なんとか持ちこたえているうちに困っていることが落ち着くところに落ち着き、解決できるという素晴らしい力があります。これを昔の人は「日薬」などと呼んでいました。そうすると「何とか持ちこたえる力」と言うものが大切になってくるわけです。そして、こうして持ちこたえることによって得られた解決は時として性急に解決を図った場合よりも本物の力となってその人に残ることがあります。

いたずらに問題の解決を先延ばしすることは望ましいことではありません。しかし、性急に解決を図ろうとしてもうまくいかないことがあるのも事実です。そんな時に何とか持ちこたえることのできる力、負の力があれば、状況を好転させることもできるのではないかと思います。コロナの時代に生きる私たちにとってこの「負の力」は一つの救いになるのかもしれません。